

2023 年度開催

**総合知育成コンクール”H20”**  
**応募作品・受賞作品の紹介**

●ごあいさつ

「文系か理系か」、「教養科目と専門科目」、「これは国語科、これは社会科」等々、私たちはいろいろなことを分類し区分して捉えることがよくあります。人生において自らの強みや専門性を身に付けていくことはとても重要なことではありますが、学問や諸科学の深さに踏み込んでいく学生時代において、それらの奥底にある、分類・区分以前のいわば「源流」を知り考えることは、複雑な課題に溢れる社会を生きていく上で失ってはならない資質能力であると考えます。それは「新たな知の創出」をもたらす創造性として、奈良国立大学機構で学ぶすべての学生に身に付けていただきたい「総合知を構築する力」です。

その育成のための一方法として、「総合知育成コンクール “H20”」を実施しました。令和5年度の当コンクールはその第1回目となります。日頃の学びや経験の中で得た「異分野融合」についての知見が、両大学から5名の学生によって寄せられ、どれもオリジナリティに満ちた素晴らしい作品として認められました。また単に応募して選考されるだけでなく、投稿者も含めて互いに作品を読み合い、対話し、楽しく交流することもこのコンクールの目指す趣旨であり、それが実現しました。

今後は、このイベントがさらに広まり、両大学の学生みならず附属学校の生徒やすべての教職員の参加によって、「奈良カレッジズ学問祭」とともに盛り上げていていただきたいと強く期待します。

奈良国立大学機構総括理事・奈良教育大学学長 宮下 俊也

## ●総合知育成コンクール”H20”とは

総合知的な自由研究レポートやエッセイを提出しあい、互いに学び合う取組です。ここにいう「総合知的」とは、各自の専門・教養の学びや日頃の生活の中での気づきを活かしつつ、本来は異なる分野・領域だと見なされがちなものを各自の視点で俯瞰したり繋げたりしたもののことを指します。文系×理系という組み合わせに限らず、文系×文系、理系×理系、あるいはアート×理系など多彩なものがふくまれます。

両大学の学部生・大学院生のみならず両大学の附属学校（教育大附属中学校・女子大附属中等教育学校）生徒も募集対象とし、提出形式は授業のレポート、論文、エッセイ、制作物などコンクールの趣旨に合っていれば自由としました。参考：[2023年度募集要項はこちら](#)

募集は2024年1月5日に締め切られ、コンクールは1月11日に奈良カレッジズ交流テラスで開催されました。当日は5つのエントリー作品が寄せられ、参加者でじっくり読み、眺め、意見交換しながら総合知を構築する力を深化させました。その結果としての理事長賞と互選による”H20”賞を以下に掲載しています。

なお、本企画の”H20”という名称は、水素Hと酸素Oの結合が水H2Oを産み出すような創発性・創造性の魅力や不思議さをイメージしたものです。

## ●作品一覧（公表に了承がえられた4件）

50音順／題目をクリックすると本文に飛べます

■ <a href="#">主体性を促す幼児教育と他分野への応用性</a> 佐土島 音々さん（奈良教育大学教育学部3回生）
■ <a href="#">歌・ことば・文化遺産を融合させた「詩吟」文化の継承</a> 東 瑞さん（奈良教育大学教育学部2回生）
■ <a href="#">東大寺南大門仁王にみる鎌倉仏師の技術</a> 山本隆萬さん（奈良教育大学教育学部1回生）
■ <a href="#">環境問題×気象予報士</a> 和田優希さん（奈良女子大学理学部3回生）
■ <a href="#">受賞作品一覧はこちら（←クリック）</a>

主催：奈良国立大学機構 連携教育開発センター

\* \* \*

→[応募作品リストにもどる](#)

## ■主体性を促す幼児教育と他分野への応用性

奈良教育大学教育学部3回生 佐土島 音々

私は、幼年教育を学ぶ中で、主体性に興味を持った。日本では、和という言葉があるように、気持ちを察したり、周りの人々と協力したりしながら生活していくことは非常に重要である。ただ一方で、周りの意見や世間体を意識することによって、思うように自分を出すことができない人も多いのではないかと思う。そこで、周りの環境に限らず、自分でやりたいことを選択したり、挑戦したりできる力を育てることが、将来の幸福感や仕事のやりがいにつながると考えている。主体性を育てるためにはどうすればよいかを学ぶため、フランスで幼児教育の現場を見ることに決めた。留学中に学んだことの中で、特に2つのことが他の分野の応用できるのではないかと思った。

1つ目は、「ものを用いた愛着形成」についてである。フランスの私立保育園の日本人保育者の方に話を伺った際、保育の中で doudou(ドウドウ)というものを用いていることを学んだ。doudou(ドウドウ)というのは、乳幼児が持っている布やぬいぐるみのことであり、安心感を与えるために使われている。フランスの子ども達にとって doudou(ドウドウ)は、母親や父親の代わりのような大事な存在であり、寂しくなった時や、お昼寝の時間に使われていて、幼稚園や保育園などに持っていくこともある。実際に見学させて頂いた私立保育園では、doudou(ドウドウ)の家というものがあり、子ども達は一人一つお気に入りのぬいぐるみや布をその中に入れていた。お昼寝の時間では、doudou(ドウドウ)と一緒に布団に入ることで、5分もしないうちに全員が眠っていた。お気に入りのもので愛着を形成することで、自分自身で心を安定させているのである。自分の気持ちを認識し、自分で整えることは、主体性にもつながっているのではないかと感じた。

この doudou(ドウドウ)の話聞いて、看護の分野にも応用できるのではないかと考えた。認知症の方への治療として、回想法というものがあることを知った。この治療では、昔の懐かしい写真や馴染み深い用品を見たり、触れたりすることで、精神や認知機能に安定をもたらしたり、安心感や自信を取り戻したりすることが目的とされている。保育園で doudou(ドウドウ)の家があるように、病院でも認知症の方にとって思い入れのあるものを近くに置きながら生活できるようにすることで、安心感や自信を持つことができると考える。

2つ目は、「子どもの意見を聞くこと」についてである。私立保育園の保育者の方に、主体性を育てるためにはどんな取り組みを行っているのかを尋ねたところ、子どもの意見をまず尋ねるとおっしゃっていた。フランスでは、「私はこうしたい」という気持ちを持っている人が多いと感じていたが、それは幼児期から家族や保育者から「あなたはこうしたいですか?」と意見を尋ねられる機会がたくさんあることが影響しているのだと考えた。実際に見た保育現場でも、

遊びの中で幼児が困っている際にすぐ助けるのではなく、「助けが必要ですか？」と尋ねて幼児が答えてから、保育者が援助する姿があった。また、給食の場面では、ワンプレートのお皿の中で「どこに入れますか？」と一人一人に尋ねる様子が印象的であった。このように、幼児期に自分の意思で選択する機会をつくることで、自分の意見を持つことができるようになると思う。

「意見を聞くこと」の大切さは、幼児教育以外にも当てはまることであると思う。例えば、車いすを押してもらっている障害者の方を見かけたとき、障害者の方本人ではなく、車いすを押している人に話しかけることが多いと聞いた。これは、「障害者の人だから話せないだろう」と無意識のうちに決めつけてしまっているのだと思う。子どもに意見を尋ねない場合と同様に、障害者に対してもラベリングをしてしまっているのだと考える。すべての人が意見を持ち、やりたいことを伝えるためには、一人一人が当たり前意見を受け入れてもらえる環境が必要である。

=====

## [→応募作品リストにもどる](#)

### ■歌・ことば・文化遺産を融合させた「詩吟」文化の継承

奈良教育大学教育学部2回生 東 瑞さん

#### 1. はじめに

私は幼少期より詩吟を続けており、その道を求めるとともに、詩吟を愛し、楽しんできた。その結果として、日本財団後援の令和5年度全国詩吟コンクール決勝大会（青年の部）では、高松宮妃記念杯（最高賞）をいただくことができた。しかしながら、詩吟は時代のあおりを受けに競技人口の減少と少子高齢化が進行しており、後継者不足が叫ばれている。

そこで、江戸時代末期より続いていると言われる詩吟の文化をどうにか広げていきたいと考え、奈良市が実施していた「地域に飛び出す学生支援事業」に申請した。当初は奈良市の子どもたちと俳句作りと譜付けそして声を出す活動を通して子供たちの感受性や文化に対する見識を高めつつ、日本の伝統文化を普及し新たな継承者の勧誘を目指したいと思っていたが（添付資料1参照）、企画実施のための一丁目一番地である子供の参加を促す広報活動に苦戦し、その試みは頓挫した。

ただ、代替案として、大学生を対象として、歌・ことば・文化遺産を融合させた「詩吟」教室を企画し、実施した。本コンクールでは、その実施内容と成果について発表する。

#### 2. 企画の内容

本企画は、①詩吟に親しみ、吟じ、詩吟を知る。②世界遺産である春日山原始林をフィールドワークし、そこで感じたことをもとに俳句をつくる。③作った俳句を鑑賞し、ナンバーワン俳句を参加者で決定し、それを吟じる。という3段階で構成される。



1段階目では、詩吟の基礎知識を説明したり、松尾芭蕉の句、「古池や蛙飛び込む水の音」に節をつけ、吟じる練習をしたりした。その上で、春日山原始林にフィールドワークへ行って、自らが吟じる俳句をつくる材料をみつけることを説明した。その際の手立てとして、ワークシート（添付資料2、3参照、企画スライド）を用いた。

2段階目では、奈良教育大学ESD・SDGsセンター研究員の杉山拓次先生にガイドをしていただき、春日山原始林をフィールドワークした。参加者は古都奈良の文化財を構成する一つである春日山の歴史や自然を体感し、感じたことをワークシートに書き留めていた。



春日山原始林フィールドワークの様子



参加者が創作した俳句の色紙

3段階目では、春日山で感じ取ったことをもとに俳句作りを行った。その上で、参加者にその俳句を色紙に書いてもらい、俳句をイメージしたデザインをしていただいた。どの参加者も工夫に富んだ俳句を作句し、デザインしていた。最後にその中からナンバーワン俳句を選んで、吟じ、企画を終えることができた。

### 3. 本企画の成果

本企画の成果は、単に詩吟を鑑賞したり、吟じたりするだけではなく、春日山原始林という文化遺産、自然をフィールドワークし、そこで感じたことを言葉で表現し、それをさらに吟じることによって表現することで、企画の参加者に詩吟が自身の思いを表現する手段として体感されたことにある。詩吟はそれ自体が魅力を持っており、私はそれを強く感じているが、その魅力を伝えることは容易ではない。「はじめに」で述べたように詩吟人口の減少傾向が大きいことがその証左である。

一方で、本企画のように自らの思いを言葉にして吟じるという新しい詩吟の楽しみ方を用いて企画をつくることで、参加者は大きな抵抗感なく、詩吟に親しむことができただろう。伝統文化は「堅く敷居が高いもの」として見られがちであるが、このように美しい自然を巡るフィールドワークや俳句づくりそして思いを色紙に絵で表現する活動とミックスさせ、「身の回りの生活で感動したことを歌に詠み、絵画で表現する楽しさ」に気付いてから、その詩を吟じることで、日常生活に「あじわいを見出すポイント」を発見し、それを詩や絵画表現そして詩吟という形で昇華する力を養うことができた。

この力は人工知能に表現する機会を奪われている現代社会に生きる私たちにとって、非常に意義のある力だ。人間の強みは、「目にしたもの、聞いたもの心で感じ、感動できること」だ。

物の感じ方は人それぞれで感動し、それを伝える表現法も異なる。私はその感じたことを表現する際のプロセスの仕方に人工知能にはない人間独自の「あじわい方」があって、これが人工知能にはない特別な力であると信じている。今回、その人間独自の特別な力を伝統文化の力を使って涵養することができたことも成果の一つである。

#### 4. おわりに

今回の企画を通じ、詩吟という伝統文化の新たな可能性を発見することができた。それは本企画の成果にも記した人工知能にはない人間の持つ特別な力の涵養である。Chat GPT などの人工知能が台頭する中で、人間の特別な「感性」の価値に気付くいい機会になった。また、その発見が詩吟を未来に受け継いでいくための重要な意義にもなる。これからも、同様の企画を開催し、人々の感性を高めるとともに伝統文化の継承に勤しんでいきたい。

[→この作品の添付資料はこちら](#)

=====

[→応募作品リストにもどる](#)

### ■東大寺南大門仁王にみる鎌倉仏師の技術

奈良教育大学教育学部 1 回生 山本隆萬

豊かな歴史文化資源が数多く分布する奈良県下で特に身近な文化財といえば、東大寺南大門に安置されている像高約 8.4m もある金剛力士像、通称“仁王さん”であろう。常に解放されている為、何時でも拝観する事ができる。この仁王像は 700 年前、十余人の仏師が僅か 69 日間の短期間で造られたものである。これだけの巨像を 700 年も前に約 2 ヶ月で造り上げたことに驚嘆すると共に、実際のところ誰が製作に当たったのか、どのようにして製作されたのかについては未だ不明なところが多い。こうした謎多き本像を科学技術による研究と文献資料による研究を複合し、具に観察する事で、往時の仏師の力や歴史的背景・勢力関係を洞察し、美術史以外の観点から本像に対する理解を深めるものである。

まず材質について、これは山口県徳地で切り出されたヒノキである事が判っている。阿形像用材は 1199 年冬から 1200 年晩春にかけて伐採され、吽形像用材は 1196 年から 1202 年に伐採されたのが、年輪年代測定調査で判った。1199 年に先立って上棟した南大門も同じく周防産の樹齢約 800 年のヒノキを用いており、恐らく仁王像に近い材だと推察される。これ程の貴重な材を入手できたのは、復興に尽力した後白河法皇の後を継いだ源頼朝の尽力によるところが大きい。1192 年「大檀越」となった頼朝は、用材確保に苦慮する重源に対し、周防国と備前国を東大寺造営料所に充てて、人夫や造営料米の事等を地頭に命令書を出して、資金物資調達を行い、更に大仏殿安置の巨像群の造立を御家人に分担させる等大きな後援を行っていたお陰で、

巨大な檜材を確保・伐採、そして周防国から大和国まで無事に運輸し、更には造立までを担う事が出来たのである。

こうしたヒノキの場合、立ち木の含水率は150%になるので、例えば現代の住宅用資材として使われるヒノキを1年以上乾燥させたとしても、含水率は15%までと水分の抜けづらさが問題となる。もう少しリアリティのある話では、ある仏師の口伝では樹齢350年のヒノキを使用する際に乾燥に10年かかるといわれている。ただ、今回は1203年7月24日の着工に間に合わせるために、長くても3年半しか乾燥できない計算になる。実際、一部の材には樹皮が付着したままのものもあり、仏像彫刻用の材木として用意したというよりは、建築資材として用意された感じが否めない。従って、乾燥期間や木口からの割れも考慮して、伐倒された後比較的早い段階で製材を行っていたと見られる。こうして製材されたヒノキは、頭部から体部中央を縦に通って支脚に至る約60cm角の一本のヒノキ材を構造の核として、その前後左右に縦材7本を組み付けて頭・体から支脚の部分を形作り、遊脚には別に2材を寄せる。これらの木材を根幹材として、様々な大きさの材、例えば「マチ材」「へぎ板」「嵌め木」などと呼ばれる小材を多数用いており、これらを含めた部材の総数は阿形2,987点、吽形3,115点に及ぶ。その像の表面は元々本堅地を用いて彩色されており、木地表面に長さ3mm~6mmの比較的長い麻繊維を麦漆に適量混合させた木屎漆に麻布で布着していたことが判っている。この長い麻繊維によって多く気泡が含まれた結果、通常以上に漆の乾燥が早まる効果があった。更に錆漆で目止めを施し、表面を整えている。現状細部をよく見ると、阿形像の裳の裏には宝相華文が僅かに残り、右掌にも赤色顔料が残るに留まるが、元々は白土地の上に極彩色を施していたことが想像できる。こうした製作スピードは現代の技術においても及ばないところで、慶派工房の技術力の高さが窺える。

さて、この時期慶派工房では他にどのような活躍があったのかを東大寺続要録等の文献から調べると、1190年6月からは六丈の大仏殿両脇侍(焼失)のうち観音菩薩像を再び定覚と快慶が、虚空蔵菩薩像を康慶・運慶父子が製作を開始し、同年8月17日に完成させた。この期間僅か60日である。更に両脇侍完成と同時に各四丈の四天王像(焼失)の製作が開始した。これらも12月10日に完成させている。こちらも期間115日という異常なスピードである。慶派棟梁の康慶が主宰する一連の造仏において六丈や四丈にも及ぶ巨像六軀をわずか半年で仕上げたことについて、「速疾の造立、奇特と謂うべし」と評されている。こうした巨像造仏の早業について、当時の人々に驚きと深い感銘を与え、東大寺復興、ひいては南都復興の兆しを見たに違いない。こうした鍛錬の元、仁王像の製作は始まった。

改めて仁王像の情報について、製作期間は1203年7月24日から10月3日の69日間で、阿形像は運慶及び快慶以下小仏師13人を率いて造仏し、吽形像は定覚及び湛慶以下小仏師12人と共に造仏した。その像高は2丈7尺6寸にも及ぶ。どちらも仁王製作時と同じ計29名のスタッフをそれぞれ分散させていたと考えられる。こうすると、仁王像の製作日数は特段早すぎる

という訳ではなく、相応の日数を費やしていたように思う。特に4丈もある四天王立像の製作を経たチームではその経験から比較的順調に造仏を進めたのではないかと推測する。700年もの昔に高さ8.4mもの巨像を69日間で作る事ができたのだろうか。というのは全く問題ではなく、寧ろ過去の人々の方が現代の我々よりも優れている部分がある事を認識させられた。

結びにあたり、本像の出来た経緯について、調べれば調べるほど仁王像に対する認識が変わっていった。すっかり知っていたはずの仁王像にもまだまだ謎が多く、知識を単に受容して終わってしまっただけでは、知識の進歩や、謎や疑問の解決に至らない事がよくわかった。中でも私の中で大きく鎌倉時代の人々の技術力・組織力に対する認識が激変した。また、こうした巨大事業には宗教の力だけではなく、政治的な側面があり、今後の仏像の配置などを調査するに当たっても、十分に考慮していきたい。

#### 【参考資料】

- ・奈良国立博物館 「特別展 快慶 日本人を魅了した仏のかたち」『第二章 飛躍の舞台へ -東大寺再興-』2017
- ・徳地町「広報 とくち No.442 」1992
- ・西村公朝『藝術新潮 第43巻』1992
- ・山本勉『仏像 日本仏像史講義』2013
- ・文化庁文化財保護部美術工芸課・奈良県教育委員会事務局文化財保存課『東大寺南大門国宝 木造金剛力士立像修理報告書』1993
- ・東大寺南大門仁王尊像保存修理委員会『仁王像大修理』1997
- ・小林 剛『日本彫刻作家研究』「大仏師法眼康慶」1978
- ・(財)美術院『美術院紀要 第4号』「東大寺南大門仁王像小補修作業中の所感集（職員座談会）」1975
- ・松島健『名宝日本の美術』5巻「南円堂旧本尊と鎌倉再興像」1981
- ・田中嗣人『日本古代仏師の研究』1983
- ・奈良国立博物館 「特別展 大勸進重源」公開講座「重源の生涯とその事蹟」聴講記  
<http://chinaalacarte.web.fc2.com/kanshou-36.html> 2023.7.30 最終閲覧
- ・NHK・プロジェクトX制作班『プロジェクトX 挑戦者たち 南大門仁王像大修理 ～運慶に挑んだ30人～』2004
- ・なぶんけんブログ『(49) みほとけの年輪』  
<https://www.nabunken.go.jp/nabunkenblog/2014/09/tanken49.html> 2023.12.24 最終閲覧
- ・佐野千絵・朽津信明・馬淵久夫『東大寺南大門仁王像吽形の修復材料選定に関する基礎データ-木屎漆中の木屎の調査および錆漆中の錆の調査-』1994
- ・『ちょっと奈良まで行ってきます2』「お水取り 過去帳のこと」  
<http://namusaijo.blog.fc2.com/blog-entry-565.html> 2023.12.24 最終閲覧
- ・「家具屋で働く双子のブログ」『木材を乾燥させるためには意外と時間が掛かるんです。』  
[https://www.soliwood.com/blog/post\\_1677/](https://www.soliwood.com/blog/post_1677/) 2023.12.13 最終閲覧



=====

[→応募作品リストにもどる](#)

## ■「環境問題×気象予報士」

奈良女子大学理学部 3 回生 和田優希

「環境問題を解決へ近づけるために気象予報士になりたい。」

こう考え始めたのは大学 2 年生の 1 月である。

小学 5 年生の時、中国の鞍山市へ行った。そこで何より驚いたのは「空気の色」だ。ちょっと黄色にくすんでいて、いつも見ている透明な空気がなかった。その光景を忘れられないまま中学生になり、いつの間にか環境問題に興味を持っていた。私は小さい頃から自然豊かな環境で育ってきたのもあって、森や川、空が大好きだ。だからこそ、大好きな自然が失われていたり、汚れていたりしている現状を知って「なんとかしたい」という感情に駆られた。

中高では砂漠緑化に関わる研究を行い、大学では地球環境についてもっと幅広く知識を得たいと思い、奈良女子大学の理学部にある環境科学コースへ入学した。そして知識をインプットするだけではなく何か行動を起こさないと意味がないと考え、学生が主体となって活動する環境 NGO 団体に入った。そこでは多岐にわたる分野の勉強会を行なっているだけではなく、関係省庁や企業に対して政策提言を行なったり、講演会に登壇したり、各種会議へユースを代表して参加したりしている。

私はその活動を非常に有意義だと感じている。環境問題に関して、知識を深めるだけでなく自分の考えや意見を対外的にアウトプットする機会も豊富だからだ。ただ、それらを通して痛感したのが「声を届けられる範囲は限られている」ということである。

イベントでブース出展しても、そこに集う人はほとんど「もともと環境問題に興味がある」人に限られている。会議でどれだけ地球環境について話し合っても「環境問題に興味がない」人というのはそこにいない。つまり、そんなことが開催されているということを知りもしない人達はたくさんいる。私はそこに、もどかしさを感じた。

環境問題は、大きくて複雑なものである。でも、一人一人が持つ意識とちょっとした行動の変化が解決への道になっていく。だから「多くの人が興味を持つ」ということはとても大事になると考えている。「多くの人」というのは「環境問題に全く興味がない人」というのももちろん含まれる。

こういう人も多く占める中で、どのようにしたら声を届けられるか、すごく考えた。  
そこで「気象予報士」という職業に出会った。

一見「気象の解説をする」仕事。環境問題の専門家ではない。  
でも「自然」と「人間」を繋ぐ仕事である。  
この仕事じゃないと伝えられない”こと”があり伝えられない“人”がいるのではないかと感じた。

「環境問題」には全く興味がなくても「天気」には興味があるという人はたくさんいる。  
でもその「天気」は、気候変動をはじめとした様々な環境問題が関わっている。  
そういうことを私は伝えたい。  
環境問題は自分に関係のない遠い未来のこと、離れた地域のこと、ではなく、いかに身近なもの  
であるかを、多くの人にとって最も身近な自然である「天気」を通して伝えたい。

だから私は「環境問題を解決に近づける気象予報士」になりたい。自然環境の専門家として、責  
任を持って正しい情報を発信したい。  
そのために、今後も気象学に関してはもちろん、各種環境問題や社会問題に対してもより広く  
知見を深めていきたい。

\*

●受賞作品（[題目をクリックする\\*](#)と本文に飛べます）。

■総合知育成コンクール・理事長賞

[歌・ことば・文化遺産を融合させた「詩吟」文化の継承](#)

東 瑞さん（奈良教育大学教育学部2回生）

■コンクール”H20”賞

[主体性を促す幼児教育と他分野への応用性](#)

佐土島 音々さん（奈良教育大学教育学部3回生）

[→TOPにもどる](#)

【参考】理事長賞作品「[歌・ことば・文化遺産を融合させた「詩吟」文化の継承](#)」に  
添付されていた資料の一部は次のページ以降にあります

# 令和5年度 地域に飛び出す学生支援事業 事業計画書

団体名	詩吟を楽しむ会	
事業名	～俳句で和の世界～おやこ詩吟体験～	
実施予定期間	令和5年11月25日	
活動場所	奈良教育大学 ESD センター多目的ホール、春日山原始林、	
活動目的	<p>日本伝統文化である詩吟の普及と高い文化の継承を目的とする。現在、日本の伝統文化は全体的に衰退しており、詩吟も同様に時代のあおりを受けに競技人口の減少と少子高齢化が進行しており、後継者不足が叫ばれている。私は幼いころから詩吟に勤しみ、詩吟を愛し楽しんできた。多くの方々に支えて頂き、高校生の時には全国大会で優勝し、文部科学大臣賞や NHK 賞を頂き、昨年は大阪府知事賞を頂くことができた。俳句作りと譜付けそして声を出す活動を通して子供たちの感受性や文化に対する見識を高めつつ、日本の伝統文化を普及し新たな継承者の勧誘を目指したい。</p>	
活動内容	<p>奈良教育大学の周辺の小学校に通う子供たちとその保護者または伝統文化に関心のある奈良市民を招き、俳句を作りその句に節をつけ詩吟として声に出して歌っていくというものである。</p> <p>企画は2部構成となっており第1部では、奈良の観光ガイドの方や奈良国立博物館元学芸部長の西山厚さんに監修していただいた。「東大寺の大仏さん」にまつわる親子で楽しめるお話を聞いてもらい、その後東大寺を訪れてもらう。奈良の文化財である「大仏さん」の魅力を楽しく学んでいけるよう「楽しく、分かりやすく」をモットーに考えた出し物を工夫したい。時間があれば、二月堂にも行く。または、奈良教育大学の研究員である杉山拓次先生による「春日山原始林」のフィールドワークを通して、感じたことを俳句にして読んでもらう。「春日山原始林」緑あふれ鳥や川の柔らかな自然の音が耳を刺激する森の魅力を生の体験で存分に感じてもらい。その中で感じたことを俳句にしてもらう。</p> <p>第2部は俳句を詠みその歌に合わせた節をつけ詩吟として歌う。参加者一人一人に配った色紙と筆ペンで詠んだ俳句を書いて発表する。俳句作りや詩吟を歌う中で感受性や表現力の幅を広げることができる。</p>	
実施スケジュール	実施時期	取組内容・実施場所 等
	準備の活動期間は令和5年10月上旬(準備期間) 実施 1～2 か月前	広報活動：ビラ配りや本学系列のホームページ上での広報活動。

実施スケジュール	(準備期間)実施 日前日	液晶テレビや音響機材などの準備。
	11月25日	～俳句で和の世界～おやこ詩吟体験のプログラム実施
活動実施により 期待される効果	<p><b>【短歌や俳句を詩吟で吟じる親子ワークショップで得られる奈良の地域活性化】</b></p> <p>1. 文化・伝統の継承:奈良は歴史的な背景や古代の伝統を持つ地域です。短歌や俳句を詩吟を通じて、これらの文化・伝統を親子で学ぶことができます。子どもたちは地元の文化に触れることで、自身のアイデンティティやルーツを理解し、地域の誇りを持つことができるようになります。</p> <p>2. 親子の絆の深化:短歌の詩吟は共同作業で行われるため、親子間のコミュニケーションや協力の機会を提供します。親子が共に努力し企画に参加することで、より強い絆が形成されるでしょう。また、ワークショップ内では地域のお年寄りの方に協力を仰ぐ場面も想定している。これは地域全体の結束力を高め、社会的なつながりを深める一助となります。</p> <p>3. 地域資源の活用:短歌を詩吟で吟じるワークショップは、奈良の地域資源である文化財や寺社、自然環境を深く知るイベントとなります。このような活動によって、奈良の観光資源や地域の魅力が親子参加者に広く発信されることで地域の活性化を図ることができます。</p> <p>4. 教育の一環としての活動:短歌や詩吟は芸術的な表現力や感性を養う上で重要な要素です。親子が共に学ぶことで、子どもたちの創造力や思考力を促進すると同時に、親の教育参加意識の高まりも期待できます。これにより地域全体の教育水準の向上に寄与し、将来の地域の発展を支える人材の育成に繋がるでしょう。</p> <p>短歌を詩吟で吟じる親子ワークショップは、奈良の地域活性化を多角的な視点から支援し、地域の文化・経済・社会的な魅力を広めることにつながるでしょう。</p>	
当年度の活動終了後の継続性・発展性について (今後の展開)	<p>参加後に詩吟に興味を持った子供や大人の方がいれば、流派を紹介し詩吟を楽しみながら普及する活動に参加することができる。また、伝統文化の継承者となれる。また、奈良の新たな魅力に気づき、発信し奈良の観光を発信することが出来る。今回の企画のみならず、定期的にワークショップを開催し、文化の振興と共に奈良の観光の促進や郷土愛や子供たちの奈良に生まれたというアイデンティティを築く活動をしていく。</p>	